



## むの・たけじ

1915年秋田県生まれ。報知新聞社を経て朝日新聞社に入社し、45年8月15日、新聞記者としての戦争責任を取るかたちで退社する。48年に秋田県横手市で週刊新聞「たいまつ」を創刊。78年の休刊まで主幹を務めた後も、著作や講演でジャーナリストとして活動する。主な著書に『99歳一曰一言』(岩波新書)、『人類の新しい夜明けを一原発と戦争、大人の責任から考える』(クレヨンハウス)、『日本で100年、生きてきて』(朝日新聞出版)など。

ジャーナリスト

## むの・たけじ

戦争のない  
世の中を望むなら  
私たち国民が  
波を起こすしかない



## 一切は秘密の中から始まる

むの まず、どういう状況で戦争に入っていくかということですね。政府が「戦争を始めるけど賛成か反対か」なんて国民に聞いたことは、ただ一度もありません。政府が「戦争が始まりました」と発表して、国民は初めて知るわけです。太平洋戦争のとき、新聞社の中にだって、「アメリカと戦争をやるらしいぞ」なんてうわさ程度にも話はなかった。

編集部 はじめに、むのさんが体験された戦争の恐ろしさを教えてください。

むの まず、どういう状況で戦争に入っていくかということですね。政府が「戦争を始めるけど賛成か反対か」なんて国民に聞いたことは、ただの一度もありません。政府が「戦争が始まりました」と発表して、国民は初めて知るわけです。太平洋戦争のとき、新聞社の中にだって、「アメリカと戦争をやるらしいぞ」なんてうわさ程度にも話はなかった。



**編集部** 何も知らされないまま始まつた戦争で、その後の国民生活は？

むの 戦争はそういうものだということが付かなければ、知らぬ間に始まつていて。だから、本当に戦争のない世の中を望むならば、普段から新聞やテレビ、雑誌などで国内外のことに関心を持つて、「これはおかしいな」と、自分で感じることが大切です。感じたら、それを人と語り合う。家族でも友達でも、誰でもいいから、話題をじやんじやん作らないといけません。

ところが、戦争をやるほうは、そういうのを最も嫌うんです。軍備など話題にするのもいや、ましてそんな話題を人々の間に広げるようなことは大嫌い。だから、そういうことができない状態をつくる。特定秘密保護法もそうでしょう。一切は、秘密の中から始まつて、ある日突然、戦争状態になるわけです。

**編集部** 何も知らされないまま始まつた戦争で、その後の国民生活は？

たというのは意外です。

**むの** 「一億一心」といつて社会が動いた。一億の国民が、ひとつ的心に

なって、命を捨てて戦争に勝つようにがんばりなさいと。普段の生活の中でいわれたのは、「ほしがりません。勝つまでは」。何でも我慢しようと、そういうことです。そのうちに食べ物や衣料品、いろいろな生活用品が配給制度になる。国家の統制が厳しくなつて窮屈になつてくる。

そうすると、次にどうなるか。国家が決めたことを守つているかどうかを見張るために、隣組制度や愛國婦人会、国防婦人会<sup>※1</sup>ができた。憲兵隊や警察が来て、「あれやれ」「これやれ」といはない。国民が自らそうしなければならないムードになつて、国民同士がお互いを監視するような奇妙な空気が出てくる。

ところが、戦争をやるほうは、そ

うするにどうなるか。国家が決めたことを守つているかどうかを

**編集部** 戦時下での医療体制は、どう

だつたのでしょうか？

**むの** 何百万人の軍隊を守るために、医療部隊を組織する。だから、国内の医療従事者はうんと少なくなりますね。病院や診療所も非常に手薄になる。それから、薬も不十分になりました。

私自身も、長女を死なせているんで

す。昭和19年9月、名前はゆかりといいます。当時は埼玉の浦和に住んで、10軒で隣組をつくりっていました。そこには、小学校に入る前の女の子が8人いたんですが、その中の一人が疫病<sup>※2</sup>にかかる、次々に5人が死んでしまつ

**編集部** たとえ家族でも信じられなくなると。

**むの** そう。隣近所や家族で力を合わせて非常事態を乗り切るべきなのにね。家族や隣近所、同じ職場の仲間とか、人間関係が急速に冷えていく。

今日は、浦和市内のどの病院にもお医者さんはいないでしょう」という返事でした。

## 病院に医師がいない

**編集部** 戰時下での医療体制は、どう

だつたのでしょうか？

**むの** 医者仲間の3人に、軍から召

集令状が来た。それで、武運長久<sup>※3</sup>を祈

る集まりがあつて、何時に帰るかは分

からない。「どうすればいいですか？」

と聞いたら、「町外れに伝染病の隔離

病院があるから、そこで待つてなさい。

先生が帰ってきたら連絡するから」と。

お昼過ぎに、その隔離病院に行つた

けど、看護婦さんも留守番の人も誰も

いない。お医者さんが来るのを待つて、

ただもう娘を抱いているしかない。ど

んどん容態が悪くなつていて、結局、

夕方には息を引き取つてしまつた。け

た。うちの子は3人目でした。

その日は、朝10時ぐらいから娘の具合が悪くて、吐いたりしていました。

ですね。それで、かかりつけの病院に「これから行くから診てもらえないか？」と電話をかけた。そうしたら、「今

さんはいないでしょう」という返事でした。



れども、伝染病だと分かっているので

家に連れて帰ることもできない。とにかくお医者さんが来るまではと、娘を抱いていた。ずっと朝までですよ。

今ここで死にかけている子が、何らかの手を打てば助けられるかも知れないのに、誰にも診てもらえない。

私が、戦争です。わが子に申し訳なくてね。私が、戦争反対の運動を命がけで続けているのは、その子におわびするよう

な気持ちが根底にあるんですよ。

## 「お母さんの元に帰りたい」

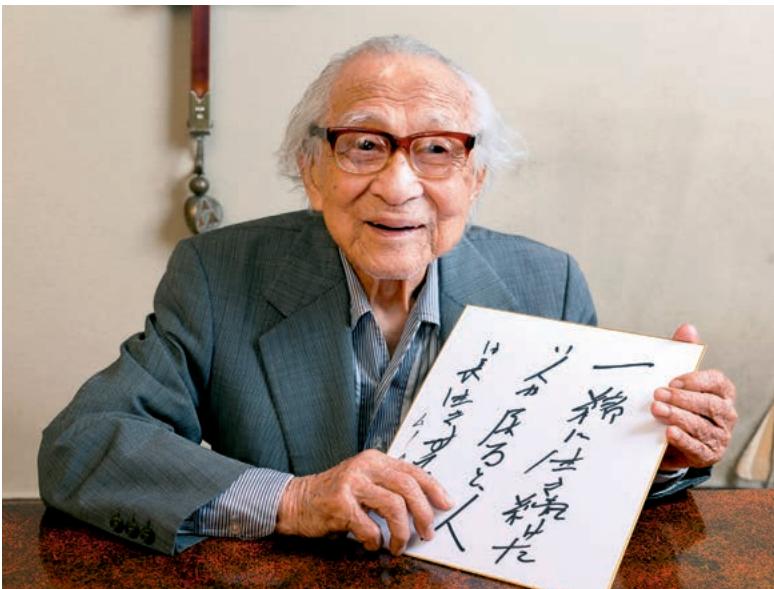
**編集部** 戦時中は、子どもたちが過酷な状況に置かれました。

**むの** 子どもを本当に大事に扱うなんてことは、戦時中はまったくなかつた。少年兵にもなれない、軍需工場でも働けない幼い子どもは、國家にしてみれば厄介な存在だつたんだな。

昭和19年に、東京の小学生が山梨へ疎開させられたでしよう。お寺なんかに、50人、100人ずつ寝泊りして。ところが食べ物が不十分だから、吹き出物が出たりしてね。子どもたちは、なぜこうしなきゃいけないか分からぬわけです。

**むの** 昭和20年3月10日の東京大空襲では、一晩で10万人が焼け死にました。次の朝、まだ薄暗いうちに焼け跡を歩くと、あっちでもこっちでも、子どもが群がつて真っ黒焦げで死んでいた。何ともいいようがなかつた。

私が取材に行つたら、東京から新聞社の人々が来たといつて、子どもたちがわ一つと集まつてきた。何をいつたか。「校長先生は



ここにいるのが安全だつていうけど、私たちは、お母さんといるのが一番安全だ。記者さん、東京へ帰つたら、私たちをお母さんの元に帰してくれるようになんて頼んでくれ」って。

「全員で富士山のてっぺんに登ればで登つてくるから」と必死になつて頼んでくる。でも、私はそれをそのままの言葉では書けない。子どもたちに戦争に疑問を持つて、母の元に帰りたがつてゐるなんて記事は載るわけもない。だけど、伝えなきやいかんでしょう。どうやって伝えようかと、苦労して記事を書きながら、ぱたぱた涙がこぼれたことを思い出します。

**編集部** 子どもたちは本当につらかつたんでしょうね。

**むの** あれは、本当は軍国体制強化法です。日本に直接の脅威がなくとも、軍事同盟を結んでいるアメリカが危険にさらされれば、自衛隊がそこに行つて、命を落とすかもしれないけれど戦うつていう。

ただ、自衛隊の名を軍隊とは変えられない。そのためには憲法九条を変えなければいけないから。そうなれば、賛成されるか反対されるか分からぬ。だから、あいまいな形の中で、軍

いるのに、一番の犠牲になるなんて。

今の政府は、戦争ができるようにすることで、平和を守る、国民の命を守るなんていうけど、とんでもない。戦争

は守るものじゃない。何十万、何百万の国民を死なせるのが戦争なんだ。そんな犠牲を払つて、まともな世の中ができるわけがないでしょう。

## 精いっぱいの言葉で話しあおう

**編集部** 平和安全法制という名目の法案が国会に提出されました。

**むの** あれは、本当は軍国体制強化法です。日本に直接の脅威がなくとも、軍事同盟を結んでいるアメリカが危険にさらされれば、自衛隊がそこに行つて、命を落とすかもしれないけれど戦うつていう。

ただ、自衛隊の名を軍隊とは変えられない。そのためには憲法九条を変えなければいけないから。そうなれば、賛成されるか反対されるか分からぬ。だから、あいまいな形の中で、軍国体制に戻そうとしている。

**編集部** 平和安全法制にしても、積極的平和主義にしても、「平和」という言葉が国民を「こまかすために使われて

いる気がします。

むの だから、国民の側から、「おかしい」「違うじゃないか」という波を起こさなきやだめなんだ。戦争によつて困らされる私たち民衆が、それぞれに大きな力はないけれど、自分の思いで、「何とかしよう」と波を起こしかねない。

広島・長崎で一瞬にして何万人の人が死んだ。その日が来ると、「さあ黙禱しましよう」って。だけど、黙つて祈つていたって、世の中よくなるわけじゃない。お互い、どんどん話し合わないと。黙禱をやめて、精いっぱいの言葉で、戦争が起こらないように寄り合わなければダメだと私は思つているんです。

**編集部** やらされるのではなく、自分で考へて行動するということですね。

むの あなたは、かけがえのない一人の人間です。人間だからやつちやいか

んこと、やらなきやいかんことがあります。それを、人様の顔色なんか気にせずに、自分で判断する。一人の人間として健康を保つかという。700万年して、自分が納得いくように生きて、納得いかないことは決して受け入れない。たったそれだけのことをみんなが思つだけで、世の中は変わっていくんじゃないですか。

## 医療福祉生協への メッセージ



**編集部** 医療福祉生協では、全国で平和活動にとりくんでいます。

**むの** 医療にかかわるみなさんに、ひとついいたいことがあります。考古学によれば、人類は700万年前に地球上に現れた。初めは木の上でくらして

いたけど、地面を歩いてくらそと考える人間が出てきた。ところが、地上に降りたら周りは肉食動物に囲まれて

いる。考えてみてください。人間が最初にやつたことは何か。

まずは、肉食動物からどう逃げて、そして、逃げるときに傷ついた仲間をどう助けるか。それから、何を食べて

いいか、何を食べてはいけないか。これは、今でいう医学でしょう。いかにして健康を保つかという。700万年前、まさに人類の最初の日から医学があつたわけです。

そこで人間同士が戦なんかやつていたら、人間なんて3日でいなくなってしまう。必死になつて助け合つたら、今日の人類がある。病気の者をかばい合う、健康を守るために助け合う。これが人間の根本原則だということです。

医によって、命を守る努力で今日がある。生存の原点に医療があることに誇りと責任を感じて、もう一度、わが身を振り返つてもらいたいと思います。

**編集部** 最後に、各地で戦争に反対をして、平和の大切さを訴えている組合員へメッセージをお願いします。

**むの** 最初にもいったように、いま大事なのは、人と人が話す機会をつくること。意見が違つてもいい。男と女、大人と子ども、年寄りと若者が、あらゆる機会に対話をすることです。若者

は社会情勢に無関心だという人もいるけど、最近は、これまでのわれわれを超えるような強い思いで戦争反対を考えている若者も出てきています。

だから、みなさんは、対話促進運

動みたいなことをやつてもらえるといいね。とにかくお互いが、胸の内にあるものをぶつけ合おうじゃないか。そこから何かが生まれてくる。ぶつけ合つて、勉強して、励まし合う。そういう風を、社会全体に広めていくってほしいと思います。

むのたけじさんの最新刊を  
**プレゼント!**

直筆メッセージ入り

『100歳の  
ジャーナリストから  
きみへ「学ぶ」』

菅聖子 共著・汐文社

本誌綴じ込みハガキにてご応募ください。

3名様

